1969.10.2 明治大学新聞

教授とバリケード

話し合いで正常化

―木下半治―

破壊に寛容であってならない

去る六月以来、本学はいわゆるバリ・ストを打たれ、バリケードの裡にある。四十一年の学費紛争のときのバリスト以来、二度目の全学封鎖が行なわれたわけである。

今では、ストといえばバリケードを伴ない、両者は必然的連関をもつかの如く考えられている。しかし、ストとバリケードとは必ずしも一体不可分のものではない。元来、ストそのものが、労働組合闘争の一形体であるが、労組の行なうストは必ずしもバリケードを随伴していない。バリケードのないストもあるわけである。労働争議のバリケードは、スキャップ（罷業破り）の就業（入場）を妨げ、また逃げ出そうとする者を囲繞して着る罷業者の脱出を防ぐ。いずれも、何ずれも消極的・防衛的の手段であり、暴力で組合員に統制の利く組合は、バリなど打たなくとも十分統制をとって闘えた筈である。労働運動史上で有名な浜松日本楽器のストも、決してバリなんかは打たなかった。

しからば、学園ストにおけるバリケードの意味は、何であろうか？

学生論的いうと、そもそもバリケード（バリカード）とは、フランスにみられた闘争形態であって、はじめは、トノーで路上に作られたものである。「レジスタンス」（抵抗）または「反逆」の象徴とされ、後には舗石、樹木、車輌等々が素材として用いられた。はじめは主として街上に、後には窓・門等にも築かれた。史上最も有名なパリ・コミューンのバリケードには主として舗石を積み重ね、その間に七五〇破を据えていた。昨年のいわゆる「五月革命」では、舗石、自動車のほか、街路樹の根元の保護のために敷いてある直径一メートルほどの鉄製のグリユ（柵）外ずしてバリケードに使った。バリケードの歴史をみると、古くは一五八五年五月十二日、アンリ四世に対するリグウルのバリケード戦、一六四八年八月二十七日のマザランに対するフロンドのバリケード戦などがあり、下って十九世紀では一八三〇年の七月革命、一八七一年のパリ・コミューン等が有名であり、十月革命で権力を握ったオルレアン王朝のルイフィリップは、「バリケードの王」（ロア・デ・バリカド）とさえいわれた。近年人の注目を引いたバリケードは、一九四四年八月のパリ解放に際するレジスタントがパリ街上に構築したバリケードである。

さて、明大におけるバリケードであるが、先年の学費紛争における和泉のバリケードでは、イキナリ教員の研究室を封鎖して教職員と学生との一時的断絶を招来した学費値上げは当時の理事会の措置であり、教員には何ら責任のない問題であった。けだし学費値上げ問題は、教授会の権限外の事項であったのである。

今次のバリケードは、大学立法反対といわゆる六項目要求貫徹のためとされている。大学立法の成立した今日の時点からいえば、バリケードの主たる目標は、六項目要求――即ち大学改革のためであろう。大学をして改革を推進せしめる横杵ないし起爆剤として意味をもつとされているのである。言葉を換えれば、バリケードは「思想の物質化」であり、大学革新の思想が具象化されているというのである。

しかし、本来、研究と教育の場である大学の在り方としては、理性的な「話し合い」による正常化が最も望ましい。九月二十六日付「『後期』開始にあたって学生諸君に訴える」という文書もあるごとく、「話し合いによる自主解決の方策」が成功せず、現在の学生の闘争が「大学闘争の段階から政治闘争にまでエスカレート」しているとはいえ、大学としては「必ずしも話し合いの姿勢をすてるわけではなく」…「大学自治の基本的態度として自主解決への途を安易に放棄すべきではないと考え」…「可能なあらゆる方法をつうじて」今後も自主解決の方途を見出していきたいと考えていたのである。

かかる大学の態度――「平和的解決」の方向の探索は去る九月三十日のいわゆる「日大理工学部奪還闘争」の激化によって、その根抵を振撼されつつあるかのごとくである。即ち、あの日の闘争で示された大学紛争のエスカレーションは、一般市民からする大学責任の追及の声となり、主として「外人部隊」の駐留による大学の社会的責任の重荷が大学側に大きくのしかかっているかにみえる。

今や大学の危機を叫ぶ声は常套語と化しつつあるかにみえる。大学危機はいろいろの面をもっている。その最大の危機の一つは、学生自治の形骸化ではなかろうか？ヤンガー・ジェネシーションは、新しい未来を創造する任務と責任とをもっている。また大学教師は、この未来創造の努力に協力し、援助し、示唆を与える義務と責任とをもっている。このヤンガー・ジェネシーションの未来創造の責任の遂行は、あくまで理性的でなければならない。それは未来の栄光性のために現在の理性的破壊に寛容であってはならないことを意味するのである。

（学務理事・政経学部教授）